

聞くと疲れる？リスニングエフォートとは

みなさんは、Listening Effort（リスニング エフォート）という言葉を知っていますか？簡単に訳すと、「聞く 努力」となります。これは、筆者が最近大学の先生から教わった新しい考え方です。Listening Effort とは、聞き取りが困難な場合に「聞いて理解する」ことに使うエネルギーが聞き取りが簡単な場合に比べて大きくなるということです。聞き取りが困難な場合としては、聴覚障がいがある場合や、騒音がある場合などいろいろ考えられます。その結果、Listening Fatigue（リスニング ファティーグ）つまり「（聞くことによる）疲労」という状態になるとのことでした。

学校では補聴器や人工内耳をつけていても、家に帰ると疲れて外しなくなるというような経験をした人は、実は少なくないのかもしれない。この Listening Effort についてはこれから研究が進んでいく分野のようです。聞くことによってどのくらい疲れるのか、聞くことによる疲れを軽減する方法はあるのか、これからの研究の進展が楽しみです。



聴覚障がい者の『逸失利益』が健常者と同等に（大阪高裁判決）

大阪市生野区で2018年、聴覚支援学校に通っていた井出安優香さん（当時11歳）が、下校中にショベルカーによる事故に巻き込まれ、命を落としました。この死亡事故について、将来得られたはずの『逸失利益』が、このほど大阪高裁にて争われました。結果、「健常者と同じ職場で同等に働くことが十分可能であった」として、逸失利益を健常者の平均の85%とした一審判決の大きな変更がなされました。

遺族側は、単に障がい者という理由で減額すべきでないとして訴え続けてきました。この控訴審では、裁判長は判決の理由に「安優香さんが年齢相応の言語力と学力を身に付けていた」と挙げました。さらに「合理的配慮によって就労環境を獲得し、将来は健常者と同じ条件で働くことができた」と予測できる」との判断によるものであると付け加えました。

今回のこの判決は、障がいの有無に関係なく、合理的配慮の提供などによって労働環境を整えるなどすれば、社会的障壁を取り除くことができることを改めて示唆してくれたように思います。共生社会の実現への大きな一歩であると言えるでしょう。



2025年 デフリンピックが東京で開催されます！

2025年11月15日～26日の12日間、デフリンピックが東京で開催されます。日本で開催することは初めてで、70～80か国・地域から約3,000人の選手の参加が見込まれています。

ルールはオリンピックの競技とほぼ同じですが、聞こえない選手がプレーするための様々な工夫がされています。陸上はスタートの号砲と合わせてランプが用いられ、光でスタートのタイミングを伝えています。

2021年に実施した民間団体の調査によると、パラリンピックの認知度が97.9%だったのに対して、デフリンピックは16.3%にとどまっています。

この東京大会を通じて、デフリンピックのことや、いろいろな選手がいることなど、認知度が高まるといいですね。聞こえない人の意思疎通の方法は、手話だけでなく、筆談やICTを活用するなど、さまざまなものがあります。また、大会会場にも視覚的に情報が分かるような機器の活用等、観戦するみなさんが見て分かる楽しさを実感できるように、工夫されています。

みなさんも一緒にデフリンピックを応援しましょう！！

相手の声が読める電話『ヨメテル』

法律に基づいた公共インフラとしてのサービスである「ヨメテル」が2025年1月23日から開始されました。「ヨメテル」は、最新のAI（自動音声認識）、または文字入力オペレータにより、通話相手の声をリアルタイムで文字にすることにより、通話の内容を視覚的に確認でき、聞こえにくさにより起こりうるコミュニケーションのずれを減らすことができます。



ここがポイント（「ヨメテル」パンフレットより）

○簡単登録、すぐ使える。

アプリをダウンロードし、オンラインで本人確認書類の確認・認証ができれば登録手続きは簡単。すぐにヨメテル用電話番号が発行され、通話を始めることができます。

○緊急通報にも対応

事故や災害、急な体調不良等いつ起こるかわかりません。ヨメテルは警察・消防・海上保安庁に対応しています。

「取引先との電話で、専門用語や数字がよく聞こえない不安から解放された。」「イヤホンや補聴器を付けていなくてもすぐ対応できる。」「音声ガイダンスによる手続きも自分で簡単に済ませられるようになった」等、いろいろな場面で活用されているようです。